

姉の手・親の手

松本 康子

「親商売、やめたいと言ってもやめられない。どんな時にも、親が子どもの手を放してはいけない。」

小椋のおばちゃん

長い間、連絡をしていなくて、ごめんなさい。日頃日本語を全く書いていないので、心のこもったメッセージを自分では書いてはいるつもりでも、変なニュアンスでおかしなことを書いてしまうのを恐れていました。せっかくお母さんに、小さいころから遠いアメリカにいても、日本のみんなとしっかりコミュニケーションが取れるようにと日本語を教えてもらったのに、今では周りに日本人がいないので、日本語で文章を書くのがとても勇気の要る行為となってしまっています。

みーちゃん達と、今後とも家族として輪を保っていきたくていつも思っていますが、それにはコミュニケーションが本当に必要ですね。私も妹のゆかちゃんみたいにもっと積極的に日本の家族と接したいと思っていますが、昔から内気な性格なので、なかなかどうすればいいのか分かりません。これから先、おばちゃん、ちーおばちゃん、お母さんのように、つらい時に団結できるような家族になりたいです。遠く離れていてもそれはできるのでしょうか。

病気してから3年になりますが、大きな山をひとつ何とか乗り越えられたと思っています。おばちゃんに「楽しく」生活するように言われて、本当にうれしかったです。(中略)おばちゃんも毎日ががんばっているのだと思うと、私も頑張ろうと思います。本当に文章を書くのが下手で連絡を怠っていますが、おばちゃんのことを毎日思っています。お母さんから「おばちゃんは病気でも、みんなの話を楽しく聞きながら凜としている」と聞いて、おばちゃんから元気もらっています。入院しているおばちゃんから元気もらっているのもおかしな話ですが、本当にそうです。

遠く離れていてもみんなでファイティングですね。頑張っていきましょう。

(長女から、病床の姉へのメール)

皆、元気？

おばちゃんの事で心配かけていますが、お父さんが側にいてくれるし、皆から励ましのメールをもらって、慰められています。今日、おばちゃんを偲んでいて、あの「須磨事件」を思い出して、また涙しました。

須磨事件の事は知ってるよね。おばちゃんが小学校6年生くらい(12歳)、お母さんは8歳、ちーおばちゃんです。わづか4歳の頃の事だったと言ったね。自分自身が親になった今でも、歩けども、歩けども遠い駅を、お母さんの手をつなぎ、歩き疲れて寝てしまったちーおばちゃんを負ぶって8時間、どんなに不安な気持ちで目指しただろうと思うの。この「姉妹の絆」話をあなた達に何度もしてきました。

この話は「子ども暴走大事件」として面白おかしく、おばちゃんは無鉄砲な人、でも根性がある妹思いな人、と受け取られているのでしょうか？おばちゃんが亡くなった今になって、なぜその出来事を姉妹の絆を築くきっかけと感じるようになったのか、と考え直してみると、自分でも思いもかけなかった事が分かりました。読んでね！

(私から子ども達へのメールの一部から抜粋)

